## 【曲目解説】

＊歌劇「魔笛」序曲

「魔笛」はモーツァルトの最後のオペラ作品です。台本はウィーン郊外のアウフ・デア・ヴィーデン劇場の座長であり、台本作家・俳優でもあるエマヌエル・シカネーダーが書き、約半年をかけて作曲されました。初演は1791年9月30日。シカネーダーがパパゲーノを演じ、モーツァルト自身の指揮によるものでした。モーツァルトが若くして他界するわずか2ヶ月前のことです。オペラといっても大衆相手の娯楽的な滑稽劇を売り物にしている劇場のこと、伝統的なイタリア・オペラとは異なるジングシュピールというドイツ語による歌芝居の形式で書かれました。しかし、ドイツ語でオペラを書くことはモーツァルトの念願であり、「魔笛」はその集大成として、過去に類を見ない自由なスタイルを持ったオペラとして完成したのです。この名作は、後世の作曲家達にも大きな影響を与え、ドイツ・オペラの祖とも言われています。

序曲は最後に書かれたもので、全曲が完成したのは初演の2日前でした。冒頭、幕開けにふさわしい堂々とした和音が鳴り響き、これから始まる世界への扉が開かれます。しかし、すぐには何も見えず、不思議な響きがその先へと誘います。緊張感が高まる中、目の前にいきなり現れる世界は・・・

モーツァルトは大層生真面目な面とふざけた面を持ち合わせた人だったらしく、緻密に計算された舞台の上で音符達が自由闊達に飛び回っているような音楽をしばしば見せてくれます。一瞬たりとも逡巡することのない場面転換は聴く人をワクワクさせますが、これがなかなか奏者泣かせなのです。本日は頑張って・・・
いえ、頑張らずに、このワクワク感をお伝えできたらと思います。　（蛙響）

＊クラリネット、ヴィオラと管弦楽のための協奏曲

マックス・ブルッフ（1838年～1920年）はケルンに生まれベルリンに没したドイツの作曲家です。ブレスラウ演奏協会長、帝室芸術院作曲部長、ベルリン高等音楽院教授、芸術院副総裁を歴任し、1908年70歳のときベルリン大学から神学と哲学の博士号を贈られています。また、日本の誇る作曲家「山田耕作」のドイツにおける師匠であったことが知られています。

ブルッフの代表作といえば間違いなくヴァイオリン協奏曲第1番です。今日ではほとんどのヴァイオリニストがレパートリーとし頻繁に演奏する曲です。その他には、スコットランド幻想曲（ヴァイオリン独奏とオーケストラ）、コル・ニドライ（チェロとオーケストラ）などが良く演奏されます。

また、ブルッフはヴィオラ奏者とクラリネット奏者にとって貴重なレパートリーを提供してくれた大切な作曲家の一人です。ヴィオラと管弦楽のためのロマンスヘ長調、クラリネット、ピアノとヴィオラのための 8つの小品、そして今日演奏する、クラリネット、ヴィオラと管弦楽のための協奏曲です。特にこの協奏曲は中音域で比較的目立たないクラリネットとヴィオラをソロ楽器としていながらその特性を最大限生かし見事な作品に仕上がっています。第1楽章アンダンテ　コン　モート　4/4　ヴィオラの派手なソロで始まるこの楽章は終始ロマン派的な美しいメロディに満ち溢れています。第2楽章アレグロ　モデラート　3/4　3拍子に乗ってソロ楽器の掛け合いが素敵です。第3楽章アレグロモルト　2/4　シンフォニーの冒頭を思わせるトランペットのファンファーレに始まり2つのソロ楽器が、からみながらクライマックスへ向かいます。

（フォアシュピーラー@Ｖａ）

＊交響曲第８番　ハ長調　「ザ・グレート」

シューベルトは1825～1826年にこの交響曲を書いたといわれています。1828年に31歳で没した彼の最後の（完成された）交響曲です。歌曲やピアノ曲で栄光を収めていたシューベルトはその若き晩年、体の不調に悩まされながら交響曲の作曲にも取り組みます。1824年ウイーンでベートーフェンの交響曲第9番ニ短調・合唱付きが初演され、それに精神的にも音楽的にも刺激をうけてシューベルトはこの交響曲を作りました。共に最後の交響曲であること、長大であることからこの2曲は比較されることが多いですが、ベートーフェンのものは教会の宗教画のように劇的でドラマチックな音楽なのに対して、シューベルトの作品は印象派の絵画のように極めて叙情的で色彩感あふれる音楽です。

この交響曲は楽譜上の繰り返しをすべて行うと 60 分を超えるすばらしく長い曲です。（シューマンは「天国的な長さ」と語っています。）同じフレーズの繰り返しも多く弦楽器の譜面はまるで壁紙の模様のようとも言われ、演奏者泣かせの曲としても有名ですが、聴いて頂く皆様に心から楽しんで頂くためには、美しい旋律を歌曲のように謳い上げたり、様々な和音の変化を音色で表現したり、と演奏者の音楽性が深く問われます。この曲は「ザ・グレート」という副題がついていますが、シューベルトにはハ長調の交響曲が第6番と第8番の2曲あり、6番の方が小規模であるため「小ハ長調」といわれ、第8番が「大ハ長調」と呼ばれることに由来しています。しかし私たち奏者にとっては曲の長さとともに、技術的な面でも、そして体力的な面とそれに伴う集中力の持続という精神的な面においても圧倒的にタフな、「偉大」な交響曲なのです。（なお、交響曲の番号ですが、この曲は、以前「7番」とか「9番」が当てられていましたが、現在は国際シューベルト協会で「8番」としていますので、それに従いました。）

第1楽章はホルンの朗々と歌う序奏から始まる自信と情熱に満ちた楽章です。第2楽章は悲劇のなか若者が淡々と歩み続けるような旋律をオーボエが奏でます。それに続く対旋律の美しい旋律は歩みを続ける若者を見守り導く女神のような輝きと美しさにあふれています。第3楽章は危機を乗り越えて歌と踊りでくつろぐような雰囲気があります。中間部はシューベルトの歌に溢れた雄大なトリオです。第4楽章は再び自信を取り戻した若者が今度は大いなる喜びを持ちながら、またしなやかに生を謳歌するようです。シューベルトの生への希望が窺えます。　（ＡＩ）